

序 章 なぜジャーナリストは危険地を取材するのか

土井敏邦

11

第1章 私は危険地をどのような方法で取材してきたか

安田純平

23

第2章 座談会「自己検証・安田純平さん拘束事件と危険地報道」

安田純平、土井敏邦、川上泰徳、石丸次郎、綿井健陽、高橋弘司

71

第3章 外国人記者が見た「安田純平さん拘束事件」

フィリップ・メスマール（「ル・モンド」東京特派員）

175

6

## 終章 これからの「危険地報道」へ向けて

虚偽情報に振り回された3年4カ月 川上泰徳

196

——安田さん拘束事件でメディアや政府に問われる課題

危険地取材をめぐる三つの危機 石丸次郎

205

ジャーナリストと市民との「溝」をどう埋めるのか 高橋弘司

216

フリーランスが危険地で犠牲になりがちな日本って、おかしい。

そこから世界を考えたい 五十嵐浩司

226

ほんとうに「救出手段」はないのか 綿井健陽

235

## ■三つの論点

綿井 まず、この座談会で議論すべき項目を提起します。

一つは、安田さんが拘束されている3年4カ月の間に、「危険地報道を考えるジャーナリストの会」（以下、「危険地報道の会」）はどんな活動や対応をしたか、何ができなかったか、何をすべきだったか。あるいは、これはやるべきじゃなかったというような点はあるのか。「危険地報道の会」がしたこと、検証を中心に、かつ、ほかのジャーナリストたちの当時の動きも合わせて、この機会に議論したいと思います。それに対して、安田さんから当事者の視点で「こういうことをしてほしかった」、逆に「それはやってほしくなかった」といった意見等を随時はさんでいただければと考えています。

二つ目として、今後また同じような誘拐・拘束・人質事件が起きたときに、周りのジャーナリストや家族・親族がどんな対応をしたらいいのか、安田さんのケースを踏まえたうえで、今後の教訓や指針となるようなことを議論できたらいいなと考えています。

川上 それに異論はありませんが、僕は、もう一つ論点を加えたい。というのは、今回の件に対する社会の受け止め方を見ていても、ジャーナリストの仕事に対する人々の理解が足りていない。なぜ危険地に行くのか、行く必要がないじゃないか、という声がある。そして、ジャーナリスト常岡浩介氏の旅券返納問題（2019年2月、イエメンに渡航しようとした常岡氏が外務省から旅券返納命令を受け、出国を禁じられた）でも、まったく理解が得られていない。いわゆる「自己責任論」も、そのような社会の無理解から来るわけです。そういう社会に対して、どう訴えていくかを考えなければならぬ。

高橋 同じことを思っていたのですが、安田さんの問題を大学の授業で取り上げると、紛争地取材の必要性を理解している学生が少ないことに驚きます。「なぜ、そんな危険なところに行くのか」とか、「政府に迷惑をかけた」という意見を持つ学生が相当数います。授業でいろいろ教えるうちに、大半の学生は理解するようになるのですが、我々の伝え方とか、世の中に理解してもらおう方法みたいなものについても、議論したほうがいいのかと思います。

綿井 2015年に刊行した『ジャーナリストはなぜ「戦場」へ行くのか』（集英社新書）

でも、そのあたりは執筆者がそれぞれ論じていますが……。

高橋　ただ、安田さんが解放されたことで世の中の関心がかなり高まり、世論も少しずつ変わりつつあるように思います。もう一度、そこはやったほうがいいかなと思う。

川上　2015年の新書は、ジャーナリストが自分たちの活動を理解してもらいたいという視点がメインで、それはもちろん今回も一つの柱なんだけど、社会に対してどう理解を求めるといふ議論は、まだ尽くされていませんからね。

■「日本は金を払う」と思わせてしまった

綿井　では、安田さんの拘束から解放まで、時系列で振り返っていきたいと思います。

安田さんは2015年6月23日に拘束されたわけですけど、「安田さんが拘束された」という最初の一報を、妻の深結さんは誰から聞いて、どういう対応をしたのか。あるいは誰に連絡し、相談したのか。そのあたりから教えてください。

安田　自分は6月22日の夜にシリアに入って、翌朝、家族にメッセージを送りましたが、

その後、連絡ができなくなった。「拘束された」ことは、今回のシリア入りをアレンジしたシリア人ガイドのムーサに妻が問い合わせてわかりました。連絡に使っていた妻のフェイスブックのアカウント名が「myu」で本名ではないため、その後アカウントが凍結されてしまつてメッセンジャーを見られなくなり、日付を確認できなくなつてしまつたのですが、6月末のことです。

シリアに入つた段階で、常岡さんにはメッセンジャーで連絡しました。彼はヌスラ戦線とか、あのあたりに人脈を持っているので、何かあつた場合には対応してもらおうという話もしていたのです。そのことは妻にも伝えていたので、常岡さんには相談しています。

綿井 取材に出発する前に、「何か緊急事態が起きたときは、ここに連絡する」といったリストのようなものを渡していたのですか。

安田 あちこちに知らせる話でもないのですが、連絡相手といつても、ムーサと常岡さん、それぐらいですかね。シリア現地の人脈がある人でないと相談しても意味がないので。

綿井 万が一のときの対応については、事前に何か深結さんには話していましたか？

安田 基本的に「何もしないように」と言っていました。ただ、商売のために「仲介人」

になろうとするいろいろな人間が妻に接触してきました。彼らは家族や政府の依頼を受けた仲介人のふりをして、拘束者側に対して、日本が身代金の支払いに応じるかのような話を勝手にしていた。そうした話はすべて止めるように、という指示を妻に徹底しておくべきだったのですが、「依頼はできません」とはつきり断ったものの、「こちらの活動としてやりたいので」と彼らが言うので、妻は止めはしなかったようです。トルコへ行ってきた話をメールなどで送ってきて、「また何かあったらお知らせします」と言ってくるので、妻が「ありがとうございます」とか「よろしくお願いいたします」とあいさつのつもりで返すと、「依頼された」ということになってしまう人もいました。この「お願いします」は社会人としてのあいさつであって、「やめてください。お願いします」というときにも使う「お願いします」なのですが、依頼を受けたい人は、それを依頼されたという「言質」にしてしまいますから、意味の取り違えがあり得ない表現をしないといけなかった。

何を言っても「言質」にされるし、妻としてはとにかく角が立たないように丁寧に対応しなければならぬと神経を使ったのですが、それも裏目に出るわけですから、とにかく本人が対応してはいけなかった。窓口になってくれる人を私が用意しなければならなかつ

た。精神的につらい状態にある家族が直接対応するのはやはり無理がありました。

2018年に同じ施設に捕まって先に解放された人道支援活動家のカナダ人は、捕まった段階でカナダ政府に電話させられて、「こういう状況だから助けてくれ」と言ったら、「無理だ」と言われてガチャッと切られたそうです。でも、1カ月で解放されているんです。だから、初期の段階で何も反応がなかったら、自分も3カ月ぐらいで放り出された可能性が高い。それを、「日本は金を払う」と拘束者に思わせてしまったことが非常に問題だったわけです。